



Title	テインペーミン年譜
Author(s)	南田, みどり
Citation	大阪外国語大学学報. 1980, 50, p. 23-40
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80806
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

テインペーミン年譜

南 田 み どり

The Chronicle of Thein Pe Myint

Midori Minamida

Thein Pe Myint started his life as a writer and a politician almost at the same time. He utilized his pen effectively in his political life. It was his ability of writing that encouraged him even when he failed many times in his political activity. His refined writing style which was filled with the sense of wit and humour attracted many Burmese readers. The amount of his works is a great deal. To study his works and life clearly, I put almost all his works in order with some important events about him and made them in a chronicle. There might be some other events which are more important than the listed ones. Because first, there is no his biography and secondly his autobiography was broken in the middle for some reasons. Therefore I would like to list up his works mainly, hoping that this will be good help for any other person to study Thein Pe Myint's works and his life.

はじめに

これは作品を中心とした年表である。事項の部分には、明白になっている言動のみを記し、社会的事項は最少限にとどめた。作品は、発表時よりも執筆時を優先した。執筆時期の明白なものはそのみ記載し、そのうち、後で新聞雑誌選集等で発表されたものには■印をつけた。執筆時期の明白でないものは、発表時期を記載した。執筆又は新聞雑誌に掲載された後、出版された作品には●印を、単行本として書き下ろされた作品には★印を、発表済みの小論や小品を集めた本には▲印をつけた。作品名は和訳し、人名地名等は片仮名で、新聞雑誌、出版社名はローマ字で書き直した。ジャンル別記号は以下のとおりである。

(評) 評論、随筆。政治、教育、社会、歴史、文学、芸術、思想など内容は多方面にわたっている。

(小) (短) は短編小説、(長) は長編小説であり、若干の翻訳翻案を含む。

(伝) 伝記

(紀) 紀行

(詩) 詩

(戯) 戯曲。映画ディレクター時代に書かれたシナリオの大部分は行方不明で、記載していない。

1914年 0才	
7月10日	上ビルマ下チンドゥイン郡、ブタリン市に、土地測量官ウバ、妻ドーミンの二男として誕生。兄、ウミャッペ (1911—53)。父方の祖父、ウソーシュウエは、文学士号を持つ知識人であり、母方の祖父、ウパウチャインは、代書業であった。
1922年 8才	
○ (月日不詳)	ブタリン市ウポニャン小学校入学。
1928年 14才	
○	教育熱心な両親により、モンユワ市ナショナルスクールに転校させられる。
1929年 15才	
○	モンユワ市ブディストスクールに転校。教師ハルーンから特別に読書指導作文指導を受ける。ピーモーニン、シェクスピア、ディケンズを好む。年代不詳であるが、この頃から作家を志し、初の小説を Kawimythman 誌に送るが掲載されず。学園祭の脚本を書き、上演される。
1930年 16才	
○	ランゲーンで、タキンバタウンらタキン党 (ドウバマーアシーアヨン、我等ビルマ人協会) 結成。その波紋モンユワに及ぶ。ハイスクールで2番目に、ナショナルリズムの象徴、丸刈りをする。
1932年 18才	
6月	マンダレーカレッジ入学。成績優秀につき1年飛び進級して上級クラスに入る。
11月	印緬分離の是非を向う選挙で、分離派候補を推して活動。
1933年 19才	
1月	マンダレーカレッジ廃校反対運動を、チャーニエインと共に指導。初の評論、新聞に載る。
○	官吏をやめ、商売に失敗し、困窮していた両親は、息子の出世を夢見て、ランゲーン大学進学を勧める。
6月	ランゲーン大学文学部へ進学。市内カマユッ地区の、Thuriya 紙職工長宅に下宿。同地区布施協会、ランゲーン大学仏教会で奉仕活動するが、世界情勢の緊迫に危機感を持ち、政治活動を指向。
○	印緬分離賛成署名を集めている時タキン党員コオウンと出会い、分離は民族運動のエネルギーを分散させるものと説かれ、非分離派に転向。タキン党に入る。
○	カマユッ地区タキン党支部をタキンキンマウンと共に結成。
○	学生自治会市内在住学生代表委員。
9月	ナショナルリズムに溢れた処女作、短編小説「愛国者キン」発表する。

10月	<p>シュウエボー地区立法院議員補欠選挙でタキンバタウンらが逮捕されたことへの抗議集会を学内で組織。弁士として登場。</p> <p>○ タキンコドフマインと出会い感銘を受ける。</p>
<p>(評)「マンダレーカレッジにおける選択ビルマ語の必要性」(Thuriya 紙$\frac{2}{2}$付)</p> <p>(小) (短)「愛国者キン」(Dagon 誌9月)「勇士ソーケン」(同誌11月)「慕情渦の如く」(Thekkathokyaungdaik 誌14巻1号)</p>	
1934年 20才	
6月	<p>○ カマユッ地区タキン党執行委員、大学仏教会執行委員。</p> <p>政治活動規制のため、大学当局より強制的に入寮させられる。学内タキン党员との結びつき深まる。</p>
9月	<p>○ タキンヌ、チョーニエイン、コウンらと Ga 結社を作り、独立論議する。</p> <p>学生自治会執行委員に当選。図書担当。委員6名中タキン党员2名。</p>
10月	<p>執行委員長ポスト空き、タキンヌが入る。</p>
12月	<p>○ この年度にストライキを計画するが、機熟さず。</p> <p>第4回ナショナルデイを自治会主催で祝う。</p>
<p>(評)「歴史教育」(Thuriya 紙1/2付)</p> <p>(小) (長)「女傑」(Dagon 誌1月、2月、4月、6月、12月、'35.1月) (未完) (短)「私の夫と私の金」■ (執筆)</p> <p>(詩)「サッカー勝利讃歌」(Bawlonbwe Aungdawhmu Hmattan 掲載)</p>	
1935年 21才	
3月30日	<p>翌4月1日と2日にわたりイエナンで開催された第一回タキン党大会で、情宣担当執行委員補佐を勤める。</p>
4月	<p>大会後、タキンコドフマインと旅行し彼に心酔する。これを契機にタキンコドフマイン伝執筆は始める。その中で文学者はビルマの独立と貧困のない国を作るための武器としてペンを使えと主張。</p> <p>ラングーン大学を卒業し、文学部修士課程又は法学部入学を志すが果たせず。</p>
5月	<p>文筆で生計をたてるべく Deedoke 社専属となり、評論、小説を書く。同社に出入りする政治家と交わる。タキンバタウンの作風に学び、タキンヌを助言者とする。</p>
<p>(評)「書評」(Deedoke 紙8/24、9/7、9/21、10/19、11/30~'36.2/26付)「二本の刀」「ビルマの映画」(同紙9/21付)「寿命」(同紙10/5付)「眼疾」(同紙11/30付)「新刊書評」(Ngwetayi 誌11月)「女性のためのエッセイ」「飲み続け」「パモー博士の歌」「雑用」「阿片患者」「J. A. マウンジーの歌」「ウバペ」(Sahsodaw 誌11月)「混戦」(同誌12月)</p> <p>(小) (短)「献身者」(Deedoke 紙4/27付)「立法院議員殿」(同紙5/4~6/22付)「ミンとトゥ</p>	

インの幼い頃」(同紙7/20付)「泣き顔に蜂」(同紙9/7付)「お前達の妻」(同紙10/5付)「あんた方の夫」(同紙10/12~10/19付)「誓い」(同紙11/23付)「戦士」(Sahsodaw誌11月)「鉄線蓮」(Deedoke 紙12/7付)「信じられること」(同紙12/14~12/21付)「水泡のように」■(執筆)

(伝)「ミスターマウンフマインことサヤルン教授」●(Deedoke 紙4/27~'36. 3/7付)「ジャワハルラルネルー」(同紙11/28~12/5付)

1936年 22才

- 2月 処分問題に端を發したラングーン大学学生ストライキを、タキンヌ、アウンサンらと共に指導。
- 4月 Myanmar Alin 紙特派員としてインド国民会議大会取材のため渡印。民族大学調査。ネルー、デサイ、ジョシーらと会見。
- カルカッタに滞在を続ける(~'38.12月)。カルカッタ大学法学部ならびに文学部修士課程に在籍。文筆業、広告代理業で生計をたてる。インド共産党に接触。
 - ベンガル州学生連合渉外担当執行委員(~37年)
 - 初の完結長編小説「進歩僧」執筆。

- (評)「書評」(Deedoke 紙1/4付)「由緒ある罎」(同紙1/11付)「ディードウのビルマ文」(同紙1/18付)「婿探し」(Sahsodaw 誌2月)「大学評議會をいかに改革すべきか」「大学の尊厳」(同紙3/7付)「留学生選出拒否」(Thuriya 紙3/17付)「留学生選出ボイコット」(Deedoke 紙3/21付)「大学ストライキの胎動」(同紙4/11付)「生計につながる教育」(同紙4/28付)「ストライキのメリット」(同紙6/6付)「ガンジー会見記」(同紙9/12付)
- (小)(短)「恐妻家」(Deedoke 紙1/4付)「レディキン」(同紙1/18付)「豎琴の音」(同紙2/8付)(翻案)「銀色のダズィン花」(Gandalawka 誌2月)「ある夜の出来事」(Myanmar Alin 紙新年特集号4月)「自由」■(執筆)
- (長)「進歩僧」★(Htun Win Press 12月)
- (伝)「ジョシー」(Deedoke 紙9/19~9/26付)「タキンカンティン」(同紙10/17付)「デサイ」(同紙10/31付)
- (紀)「カルカッタの町」(Deedoke 紙4/25付)「ラックナウの町」(同紙5/2付)「カルカッタからの手紙」(同紙8/8、8/15、11/17付)

1937年 23才

- 「進歩僧(テッポンジー)」の仏教界批判の内容大反響を呼び、僧侶の一部、出版禁止を要求してデモを行なう。以後テッポンジーテインペーと称される。(それ以前ペンネームに、ワネガペー、ウチャウロン、テインネヌエ、テカトアチャー等を使用)

○	長編「ストライキ学生（ダベイフマウチャウンダー）」で、36年学生スト解除に反対を表明。
12月	タキンヌらにより結成されたナガーニー読書クラブ執行委員（～38年）
<p>(評)「乞解答大学当局ならびに編集長殿」(Burma Journal 1月)「真の教育」(Myanma Alin 紙新年特集号4月)</p> <p>(小)(長)「ストライキ学生」★(Htun Aye Press)</p> <p>(伝)「ピーモーニン」(大学自治会機関誌 Oway 7巻1号)</p>	
1938年 24才	
○	タキンフラペーと共に、ベンガル共産党議長ムサファアーメドと会見し、ビルマ共産党設立への協力要請。
12月	1300年大事件と呼ばれる一連の大暴動。学生ならびに国内産業ゼネスト。帰国。
<p>(評)「たいした相異はなかりょうミントゥウンよ」(Kyibwaye 誌4月)「昔の反骨作家達」(Gandalawka 誌4月)「当面の我等の任務」★(Nagani Press)「印緬紛争」★(同)「人民権力とフランス革命」★(同)</p> <p>(小)(短)「石油」(Myanma Alin 紙新年特集号4月)「嘆きの歌」(Dagon 誌9月)「マーリー」■(執筆)</p> <p>(長)「現代の悪霊」★(Myanma Alin 選書)</p>	
1939年 25才	
1月	1300年大暴動指導者の1人として逮捕される。
3月	学生ストライキを独断で早期終結させ、タキン党より除名処分。映画ディレクターとなり多数の脚本を書いて生計をたてる。(～40年)
8月	ランゲーン市内に、後のビルマ共産党社会党の母体となるマルクス主義学習会がいくつか組織されるが、謹慎中で関与せず。
<p>(評)「山村の改革」(Myanma Alin 誌7月)「ヒットラーとチェンバレンいずれが悪いか」★(Nagani Press)</p>	
1940年 26才	
○	タキントントゥンの要請でタキン党に復帰。
○	チャーニエインの要請で人民革命党(後の社会党)に入党
<p>(評)「ドイツは馬鹿なのか」★(Khit Thit Press)</p> <p>(小)(短)「間違いです」(Deedoke 紙6/29付)</p>	
1941年 27才	
○	人民革命党の任務でマンガレー郊外で日本軍からの独立闘争援助のための武器投下を待つが得られず。中国における日本軍の残虐行為からも対日不信を抱く。抗日冊

	子を作成。潜伏する。その後友人が日本軍に捕えられたり殺害されたりしたため反日感情高める。
(評)「三蔵を守る勇士達」(Hanthawaddy Journal 1巻6号) (戯)「ウソー英国へ行く」(Myanma Alin 紙8/21付)	
1942年 28才	
3月	日本軍ラングーン占領。
5月	中国へ脱出はかるが失敗。
7月	陸路インドへ脱出。英国情報部デリー支局勤務。
9月	シムラの亡命ビルマ政府を訪ずれ失望する。
○	カルカッタでインド共産党のジョシーと親交を持ち、ブラウダーイズムの影響を受ける。
1943年 29才	
1月	中国重慶訪問し、約7ヶ月滞在する。周恩来、宋慶令、エプスタインらと会見。エドガースノーと親交。
8月	インドに戻り、インド共産党の信頼を獲得。
○	インド共産党、全インド学生連盟の後援で、ビルマにおけるファシスト侵略の実態についてインド各地で講演。
○	ボンベイのインド共産党本部に滞在し、同党理論誌にビルマ事情中国事情投稿。
○	ビルマ共産党はじめ国内抗日勢力と連絡つく。
(評)「What Happened in Burma」★(Allahabad Kitabistan)「Dr. Bamaw nearly but not quite」(執筆)	
1944年 30才	
6月	ビルマ国内に抗日統一戦線AFO(後のAFPFL)結成さる。
9月	脊椎カリエスで以後1年間療養。
○	ビルマ共産党に入党。
(評)「Towards between mutual understanding and greater co-operation between British and the People of Burma」(執筆9月) (戯)「Over the Ashes」(執筆)	
1945年 31才	
3月	AFPFL抗日蜂起。
8月	ビルマ共産党第2回大会で書記長に任じられる。
10月	ビルマ帰国。資本主義諸国をソ連の同盟勢力と規定し、協力を促す、ブラウダーイズムの影響濃いインド共産党の指令を持ち帰る。

<p>(評)「From Fascism to Free」(執筆2月)「Between India and China」(執筆6月)「人民解放同盟の歩みを理解することが重要だ」(Janejaw 紙11/3付)「人民はカンパ活動に結集しよう」(Pyidhu Ana 紙12/8付)「世界の情勢」★(Myanma Alin Press)「当面の政治」★(Aung Press)</p> <p>(戯)「時代は変わる」★(Aung Press) (Over the Ashes ビルマ訳)</p>	
1946年 32才	
2月	タキンソー、共産党中央委員会でAFPFLを帝国主義の手先と批判し、ブラウダーイズム導入の責任者としてテインパーミンを批判。
3月	タキンソー離党し、赤旗共産党を結成。
7月	テインパーミン、ビルマ共産党政治局員、AFPFL執行委員会内の共産党代表者となる。
9月	ゼネストおこり、アウンサン内閣組閣。 テインパーミンAFPFL書記長選挙で社会党チャーニエインに敗れ、書記長補佐。
10月	アウンサン内閣農林水産大臣となるが、AFPFLから共産党が除名されて翌月大臣を辞任。
11月	共産党本部勤務のキンチーチーと結婚。
12月	ビルマ共産党はインド共産党の批判を受け取る。テインパーミンは、自分にも責任の一端があると申し出て、6ヶ月自て学習のため中央委員会を離れることを希望。学習期間中、党の路線に同意できないことを悟る。
<p>(評)「ビルマ共産党と仏教」(Pyidhu Ana 紙1/5付)「レーニンの絵を奪う」「イエナンの地に古着古毛布を送ろう」(同紙1/12付)「時代変革の革命の明白な前兆AFPFL大会」「ビルマの教育と共産党の見解」(同紙1/26付)「座礁、水漏れのない教育計画と共産党の見解」「人民の問題」(同紙2/2付)「革命の日3月27日」(同紙3/2付)「革命を労働者が指導する」(同紙3/23付)「常に分裂主義者のタキンソー」(同紙3/30付)「尊厳」(Saya Saya 誌2巻2号)「1軒に1つのかまどというスローガン」(Pyidhu Ana 紙4/6付)「はいの1言、原爆1つ、誠意ある総督殿」(同紙9/7付)「共産主義者は秩序的に行動する」(同紙9/21付)</p> <p>(伝)「コチemmaウンはもういない」(Pyidhu Ana 4/6付)</p>	
1947年 33才	
1月	制憲議会選挙に関する権限外の記者会見を行ない共産党政治局より譴責される。
2月	休党命令を受ける。
4月	制憲議会選挙で同党中途半端な参加により敗北。 自己の見解を同党議長タキンタントゥンに送るが党内には回されず葬られる。
7月	アウンサンらが右翼に暗殺された事件に関し、AFPFLと共産党の団結を訴える論文

10月	<p>を変名で発表し、平党员に格下げされる。</p> <p>AFPFLとビルマ共産党団結不可能となる。</p>
<p>(評)「国益に尽くす者不慮の死を遂げず」(Burma Journal 4/17付)「ウバチョー先生」(Janejaw 誌8月)</p>	
1948年 34才	
1月	<p>ビルマ独立。</p> <p>「時代を後退させる作家達」を発表し、文学の階級性に関して論議起こる。</p>
3月	<p>ビルマ共産党離党声明発表。同党は武装闘争に入り、以後軍の一部、少数民族などの反乱相継ぐ。</p> <p>以後映画シナリオ執筆で生計を立てつつ左翼勢力統一のために働きまわるが成功せず。</p>
8月	<p>クーデター未遂により1年間服役。その間に、共産党とAFPFLの団結と不和をテーマとした長編小説「開けゆく道」など執筆。</p>
<p>(評)「時代を後退させる作家達」(Janejaw 誌1月)「27周年の偉大なダゴンへ」(Dagon 誌9—10月号)「ナショナルデイに何をすべきか」(Deedoke 紙11/5付)「真の進歩へ」(Bama Aye Htun Aye Press)「一步前進して」★(Kyawlin Press)</p> <p>(小)(短)「母」■(執筆)</p> <p>(長)「開けゆく道」★(執筆)</p>	
1949年 35才	
7月	<p>出獄。</p>
9月	<p>テインパーミンと名乗る。</p>
10月	<p>「今日の人民文学の諸問題」を発表し、ビルマ文学を反動文学、新ブルジョア文学、社会文学、人民文学の4種に分類。人民文学作家と社会文学作家を中心に新ブルジョア文学作家の1部をも協力する人民文学統一戦線を提唱。</p>
<p>(評)「彼等2人いずれが嘘つきか」(Nagani 誌2月)「毛沢東の教え」★(執筆3月)「不団結と批判」(Thwethauk 誌5月)「題材を探す作家達」(同誌8月)「今日の人民文学の諸問題」(同誌10月)</p> <p>(小)(短)「すべて異常ありません」(Thwethauk 誌10月)「苦い甘さ」(同誌12月)「裏切者だとは」■(執筆)</p> <p>(紀)「ラフコーヤとウンサン」(Thwethauk 誌11月)</p> <p>(戯)「緑にもえて」(上演)</p>	
1950年 36才	
○	<p>中緬友好協会副会長。</p>

○	世界平和協議会副議長（～51年）
10月	インド滞在期についての体験的紀行「戦時の旅人」執筆これより2年続く。
	(評)「未だ成就せぬビルマ革命」(Thwethauk 誌1月)「全民族の統一と民族主義」(Kyimon 誌11月)「なぜ和平なのか」(同誌12月) (紀)「戦時の旅人」(Shumawa 誌10月～'52.8月)
1951年 37才	
6月	総選挙中、人民和平連合に加入。
	(評)「ビルマ絵画の発展」(Thwethauk 誌4月)「さらに広範な世界平和の統一行動」★(Kyawlin Press 4月)「小説を書くことは必要か」「母を飛び越え叔母を慕う者達」(Thwethauk 誌5月)「新時代のビルマの絵画」(同誌6月)「パーゲー」(同誌7月、8月)「政治活動と翻訳問題」(Sapay Beikman 誌7月)「人民の祭」(Sandhit Oo 誌9月)「新聞と自由の権利」(Thwethauk 誌9月)「勝利の地を踏めば王となる」(同誌10月、11月)「新文学に関して(ダゴンターヤーへの回答)」(Shumawa 誌11月)「世界人口について」(Thwethauk 誌12月) (小)(短)「第三流の場所」(Thwethauk 誌3月) (長)「愛すればこそ」●(執筆、一時中断し翌年完成) (紀)「私の愛するインド」(Kalaunzon 誌8月、9月)
1952年 38才	
3月	人民和平連合の規律に従わず、一部メンバーと共に脱退。人民統一党結成。書記長となる。合法左翼勢力の一員として反政府活動を展開。
5月	メーデーでビルマ代表として訪中。
10月	アジア太平洋平和会議準備委員会で訪中。
	(評)「ビルマ人民はともかくも」(Thwethauk 誌3月)「ガバエーパコダの優雅さ」(同誌4月)「下熱剤の副作用」(同誌6月)「ソ連と通訳」(Sapay Beikman 誌8月)「安居明けの輪廻」(Thwethauk 誌10月) (伝)「俳優ウポセイン」●(Myanma Alin 紙2/4付～5/19付)「新民主主義の文化貢献者」(Thwethauk 誌11月)「絵画ウオンルウィン」(Shnmawa 誌11月) (紀)「すべての花よ開け」(Thwethauk 誌1月、2月)「赤い中国からトゥエータウへ」(同誌8月)「水、地、言語は異なれど心は一つ」(Shumawa 誌10月)「さらば古き時代よ」★(Baho Sapay Press)
1953年 39才	
6月	独立運動を背景とした大長編「東より陽の昇るが如く」執筆はじまり、4年間余続く。

9月	「戦時の旅人」続編「連合軍とビルマの使節」執筆はじまり2年間余続く。
	(評)「戦場の英雄・建設の模範労働者」(Myawaddy 誌1月)「人民が執着する鹹水神」(同誌2月)「道徳的再軍備」(Thwethauk 誌3月)「演劇の将来」(Myawaddy 誌4月)「スターリンと私」(Thwethauk 誌4月)「血肉にしみ込んでいるメロディー」(同誌7月)「子供達の教師に」(同誌8月)「真実を描くこと」(Pyidawthit 誌10月)「仏教画家ウバチーの絵の研究」(Myawaddy 誌10月)
	(小)(長)「東より陽の昇るが如く」●(Myawaddy 誌6月~'57.10月)
	(伝)「チャーリーチャップリン」(Thwethauk 誌1月)「ウソー英国へ行くの劇とウキンマウン」(Shumawa 誌1月)「タキンポーフラ」(大学自治会機関誌 Oway 1巻6号)
	(紀)「連合軍とビルマの使節」●(Shumawa 誌2月~'55.5月)「楽しき宮殿は戻らじ」(Thwethauk 誌9月、'54.3月)
1954年	40才
	(評)「インドシナからビルマへ」(Pyidawthit 誌6月)「工業発展する中国」(同誌8月)「アジアオリンピック」(Myawaddy 誌9月)「文学と彼等の見解」(同誌12月)「社会主義と我等ビルマ」★(Pyidawsoe Press)
	(伝)「ヨ一族枢密官ウポフライン」(Shumawa 誌2月)
	(紀)「メルギーの貝の中の真珠」(Thwethauk 誌8月~'55.5月)
1955年	41才
○	人民統一党として民族統一戦線NUFに加わる。
	(評)「生物学」(Shumawa 誌7月、8月)「数学」(同誌10月、'56.1月)「作家と和平」(Sapay 誌)「東、東南アジア環境会議報告」(東、東南アジア環境会議)
	(小)(短)「櫓の折れた漕ぎ手ゴエセイ」(Shumawa 誌6月)「不合理なことよ」(Myawaddy 誌7月)「完全浄化」(Shumawa 誌9月)
	(伝)「タキンコドフマインヘスターリン平和賞」(Shumawa 誌1月)「タキンコドフマイン」(タキンコドフマイン生誕特集誌、ランゲーン緬中友好協会)
	(紀)「北へ帰る」(Thwethauk 誌7月~'56.12月)
1956年	42才
4月	第2回総選挙。ブタリン地区選出NUF代表国会議員となる。
○	ビルマ作家協会会長(~58年)
10月	魯迅没20周年記念行事で訪中。
12月	アジア作家会議でニューデリーへ。文学の独立に関して問題提起。
	(評)「物理学」(Shumawa 誌3月、9月)「革命時代の体験」▲(Shwepyitan Press 過去の政治評論を収める)

(伝)「作家ウヌ」(Myawaddy 誌1月)	
(小) (短)「助けられるなら助けて下さい」(Myawaddy 誌1月)	
1957年 43才	
5月	英国議会視察団の一員として訪英。
12月	A A連帯カイロ大会にビルマ代表で参加。
(評)「化学」(Shumawa 誌3月)「民族の姿が見える文学」(Myawaddy 誌3月)「地質学」(Shumawa 誌4月)「人類学」(同誌12月、'58.1月)「全国に示し論議すべし。人の方法獣の方法。内戦停止問題」(Myanma Sapay 誌1957—58年度)「学生問題をいかに指導するか」(Oway 誌1956—1957年度)「政府不信声明」★(Ngeinchanye Press)「人民統一と和平への見解」★(人民統一党)「ブタリンの声」★(Shwepyitan Press)	
(紀)「チンドゥイン河とドゥイン山」(Pebuhlwa 誌9月、10月)「重慶今昔」(同誌11月、'58.2月)	
1958年 44才	
○	人民義勇軍(PVO) 投降部分を人民統一党に合併させ人民同志党結成。
6月	短編「シントゥマナ」発表以降小説から社会性薄れ、随想風になってゆく。
8月	Boutahtaung 紙創設。主務となりコラム担当。
10月	ネウィン選挙管理内閣発足。
(評)「チンドゥイン地方の文学遺産」(Chindwin Journal 3月)「新しい文学勢力の育成」(Pebuhlwa 誌4月)「AFPFL分裂とウバスウェ、AFPFLを守る者いずこ」(Myanma Alin 紙5/11付)「マンダレー大学」(Shumawa 誌5月)	
(小) (短)「シントゥマナ」(Shumawa 誌6月)	
(紀)「人、時代は変われどナイル川は流れゆく」(Myawaddy 誌3月、4月)	
1959年 45才	
○	ビルマ作家協会副会長。
○	「東より陽の昇るが如く」サペベイマン賞長編部門で千チャット賞受賞。
○	短編「老教師の問題」老人の内的不貞の是非をめぐる反響呼ぶ。
(評)「地理学」(Shumawa 誌5月)「当面の文学」(Sabaji 誌6月)	
(小) (短)「老教師の問題」(Myawaddy 誌6月)	
1960年 46才	
4月	ウヌ内閣組閣。
(評)「進歩した小説の時代」(Anupinnya Lawka 誌)	
(伝)「チャーニエイン」●(Boutahtaung 紙連載12月終了)	
1961年 47才	

2月	総選挙に敗れ議席失う。
5月	東京で開催のアジア作家会議にザワナと共にビルマ代表で参加。中国、ベトナム民主共和国にも立ち寄る。
9月	ジャーナリストとして訪米。
○	ビルマソビエト友好協会会員、緬中友好協会副会長、ビルマ作家協会副会長、ビルマ世界平和協議会副議長。
(評)「私の懐しむ水祭」(Ngwetayi 誌3月)「民族の独立と連邦の文学」(Shumawa 誌3月) 「東より陽の昇るが如く」(Kedhiban 誌6月)	
(紀)「東を眺めつつ西へ行く」●(Boutahtaung 紙9/13付~'62.1/10付)	
1962年 48才	
3月	ネウイン將軍による軍事クーデター。革命評議会結成。
7月	ビルマ社会主義計画党設立さる。 革命政府の登場を歓迎。規律違反により人民同志党から除名さる。以後政治活動から身を引き革命政権に側面より協力。
○	革命評議会文化評議会委員。
○	大学中央評議委員ランゲーン大、経済大の代表。
(評)「ネウイン將軍再登場」●(Boutahtaung 紙3/3~3/11付)「漫画革命」(同紙3/25付) 「ソーミン大佐から作家へ」(同紙4/11付)「前進誌2号」(同紙6/4付)「今日のビルマの 状態と労働者階級」(Athit 誌6月)「人民の誠意と両親の誠意を知れ」(Boutahtaung 紙10/7付)「民族文学大学歓迎」(同紙11/19付)「バモーションアウンの灯火、火花」 (同紙11/26付)「マウンルンスエの趣味の人」(同紙12/7付)「人類の願い軍備廃止と世 界平和平議」(ビルマ軍縮会議)	
(小)(長)「泥の中の蓮」★(Shumawa Press)(トルストイ作「復活」の翻訳をシナリオに したものをミヤタンティンが小説化)	
(伝)「ヤンアウン」(Yan Aung Press)	
(紀)「革命政権下のブタリンをゆく」●(Boutahtaung 紙12/23—12/31付)「友好の旅人」★ (Shwepyitan Press)	
1963年 49才	
○	作家協会会長。
6月	和平問題に関する意見の相違で作家協会会長を辞す。
9月	政府共産党和平会談、2ヶ月後に決裂。
(評)「旅行1回につき文1つ」(Boutahtaung 紙1/11付)「ランゲーン大学からの2つの喜ぶ べき知らせ」(同紙2/16付)「学生側から改めることが必要」(同紙3/2付)「言葉が豊か	

で意味が深いウボンニャ」(同紙3/20付)「過去を学びつつ人民の中へ」(同紙4/3付)
「マスイレーが笑ったところがかかわりはない」(同紙5/14付)「社会主義出版界をめざし奮闘するボウタウン」(同紙5/20~6/2付)「即時実現せよ」(同紙6/15付)「ボウタウンとして願うこと」(同紙6/17付)「極左偏向を指導したタキンソー」(同紙6/28付)
「ビルマ社会主義計画党と作家」(Sajun 誌7月)「ビルマ共産党の反応」(Boutahtaung 紙7/5付)「中央どうし交渉すべきという要求」(同紙7/6付)「テインペーからウヌへの手紙」(同紙7/19付)「国内の山猫とニューヨーク県の声」(同紙8/5付)「タキンティン達を歓迎する」(同紙8/11付)「赤旗達の不誠実」(同紙8/26付)「外国から入国を画策するタキンソー」(同紙8/17付)「和平交渉成功」(同紙9/1付)「ボウゼヤーに聞かせたいこと」(同紙9/2付)「和平交渉と人民の目算」(同紙9/6付)「大学の10月閉鎖」(同紙9/15付)「人民日報」(同紙10/5付)「施主は壇上に、次に何をなすべきか」(同紙11/14付)「和平のため革命政府は気長に交渉すべき」(同紙11/15付)「ガラスの家の住人が他人を鉛で打つ」(同紙11/16付)「民族民主統一戦線との交渉決裂の原因」(同紙11/19付)「交渉の内外」●(同紙11/19~12/1付)「大学3学部閉鎖」(同紙11/30付)「大学界のよき伝統」(同紙12/1付)「出版評議会とボウタウンの論争」★(共著 Myanmar-byuha Press)

(紀)「学ぶ旅人」(Boutahtaung 紙12/21付~'64.1/15付)

1964年 50才	
3月	全政党内に解党令。企業等の国有化はじまる。
9月	Boutahtaung 紙国有化。編集長となることを要請されるが辞退し、論説委員となる。(~73年)
<p>(評)「民族精神と芸術賞」(Boutahtaung 紙2/7付)「ダバウン月の影響と老教師の問題」(同紙2/26付)「混在しつつ変化する大学」(同紙4/20付)「シェクスピア400年」(同紙4/23付)「スト破りの人物の本を出版したミャワディ」(同紙5/8付)「古きを守り、新らしきを各自作り」(同紙5/23付)「教育省の計画に学生父母は協力せよ」(同紙6/7付)「文学士号を持つ教員」(同紙6/21付)「レティサヤドーとマハーバンドゥラ」(同紙7/18付)「生死の哲学」(同紙7/10付)「英語教育法改革」(同紙8/16付)「大学入学資格試験合格者へ」(同紙8/17付)「労働者所有の新聞」(同紙8/31付)「人民とチャーモンの人民所有拒否」(同紙9/11付)「試験制度は能力測定の十分な方法にあらず」(同紙10/15付)「敗北の中の微笑」★(Pagan Press「人民の中に真実を求める」)「大学紹介」▲(Kyonpyaw Press)(Shumawa 誌掲載をまとめる)</p> <p>(小)(短)「その彼女とバラスイートゥ」(Boutahtaung 紙11/19付)</p> <p>(伝)「愛国詩人タキンコドフマイン」(Boutahtaung 紙6/24付)「タキンコドフマインとは」</p>	

(同紙6/27付)「社会主義の勝利を信じたレティパンディッタウマウンジー」(同紙12/23付)

(紀)「ナワデーとワズィラのサータウン村へ」(Boutahtaung 紙10/24付)「人民の中に真実を求める」▲(Pagan Press)(既出の紀行、評論6編を収録)

1965年 51才

(評)「日数の延びたビルマ宮殿博」(Boutahtaung 紙1/8付)「転居」(同紙1/17付)「民族文化から植民地色脱する」(同紙2/12付)「押韻スローガンの背景」「連邦の日とビルマ族代表」(同紙2/18付)「ユニャーナ計画党へ」(同紙4/4付)「勤労奉仕学生戻る」(同紙5/6付)「綴字論争」(同紙5/14付)「英国占領に抵抗した愛国者達」(同紙5/25付)「バラと一篇の詩」(同紙5/28付)「人民教育家をめざす学生達」(同紙5/29付)「秩序のゆるんだ大学」(同紙6/11付)「学生達は農村へ、労働者は大学へ」(同紙5/12付)「タキンバタウンとシュウエニヤマウン」(同紙5/15付)「勤労者夜学の目的」(同紙5/18付)「試験合格者リスト」(同紙5/25付)「合格率の上昇」(同紙5/29付)「ウエターリからサンスクリット語碑文」(同紙7/2付)「大学教師の競争」(同紙7/7付)「大使館の外国語学校」(同紙7/9付)「小学校教育の充実」(同紙7/17付)「町の人々に愛される息子から議長へ」(同紙7/26付)「ビルマの起源タガウンよりの歌を排する者達へ」(同紙8/1付)「人民文学のタキンチャーセインからのアバのタキンチャーセインへ」(同紙8/22付)「英語第一外国語に反対する者へ」(同紙9/7付)「議長自身の宣言」(同紙9/8付)「人民所有記念」(同紙9/11付)「下りと上り」「人民所有と私」(同紙9/12付)「児童文学大会」(同紙9/16付)「児童のための展望台」(同紙9/17付)「児童文学の水を飲む川」(同紙9/22付)「児童文学」(同紙9/25付)「幼稚園児の詩」(同紙9/29)「マンダレー文理大を揺がす」(同紙9/30付)「7797人大学入学許可」(同紙10/4付)「新方式でない1つの学校」(同紙10/17付)「計画党誌を歓迎する」(同紙10/18付)「火祭りと青少年の日」(同紙11/8付)「退職金」(同紙11/12付)「組織する前に作家の定義を」(同紙11/30付)「多数」(同紙12/1付)「芸術文学賞」(同紙12/3付)「大学に必要な学生教師と政府の協力」(同紙12/4付)「民族教育」「ナショナルカレッジ教授サヤルン」(Tekkatho Myanmaza Kaukhnnotchet)「小説の書き方」(Atwe hnit Aye Sapayyeya Pyattana)

(小)(短)「日没時の愛」(Boutahtaung 紙10/10付)

(紀)「ぼんやりしたパリと平和の旅人」▲(Seintin Press)(過去の紀行をまとめる)

1966年 52才

(評)「シュウエピーエーの学生がボウヤット村を包囲した事件」(Boutahtaung 紙1/13付)「文理大から取り出す」(同紙1/15付)「キッサン文学という指標をくつがえす」(同紙1/20付)「相互批判」(同紙2/1付)「児童文学大会の成果」(同紙2/8付)「映画を見ることは」

(Do Kyaungdha 誌 2月)「学生の芸術祭」(Ngwetayi 誌 2月)「ビルマ史研究一氣に浮上」(Boutahtaung 紙3/22付)「研究討論会すぐれた人、つまらぬ人」(同紙3/29付)「歩硝の恩」(Myawaddy 誌 3月)「水祭りと作家」(Boutahtaung 紙4/14付)「新しいものを建設中に発見した歴史的な古いもの」(同紙5/21付)「基本教育法施行の前に」(同紙5/24付)「英語をいかに学ぶか」(同紙5/28付)「ビルマ語使用時代に英語を落しただけで落第すべきか」(同紙6/16付)「9学年テスト合格の根拠を示せ、終子音のつけ方を1種類に」(同紙7/5付)「さらに1つの困難」(同紙7/6付)「39種の言語に8000の用語」(同紙7/7付)「用語の分離と均一化」(同紙7/8付)「大学入試合格者達へ」(同紙7/13付7/14付)「文法ができないことばかりができない」(同紙7/26付)「できるだけやさしく、法則はできるだけ少なく」(同紙7/27付)「大学一方通行方式を閉ざす」(同紙7/29付)「大学に入れるように、さらに書かせてもらえば」(同紙8/4付)「ジャーナリストと支配者」(同紙8/10付)「議長落胆」(Myawaddy 誌 8月)「すべての人々の繁栄のために作家とは」(Ngwetayi 誌 8月)「彼等ははまだわかっていない」(Myawaddy 誌 9月)「文を書くこと、解放」(Ngwetayi 誌 9月)「大学において優秀な努力家のために」(Boutahtaung 紙10/12付)「新聞記者時代の思い出」(同紙10/21付)「ボーガーと純金」(Myawaddy 誌 10月)「ブタリンの駅とセンダン樹」(Ngwetayi 誌 10月)「自主独立方式の成功した大会」(同紙11/5付)「作家と批評家」(Ngwetayi 誌 11月)「民族文学賞」(Boutahtaung 紙12/1付)「唯一の文学者組織」(同紙12/2付)「ベトナムの友人達は感謝して」(同紙12/10付)「空想と科学」(Ngwetayi 誌 12月)「思想、文化の領域で手控えてはいけない」(「国軍兵士の立場と今日のビルマ文学」「多くの人々がけなす恋愛小説」「文学文化批評で注意すべき諸点」「サペイマン賞と小説」(Atwe hnit Aye Sapayeyya Yamunasapay)「ビルマ文学の諸問題」▲ (Oukkala Press) (過去の文芸評論を収録)

(小) (短)「合法的放蕩者」(Myawaddy 誌 1月)「ティッサことセイネッ」(Myawaddy 誌 11月)「短編小説選集」▲ (Pagan Press)

(紀)「チン丘陵の歴史のはじまり」● (Boutahtaung 紙3/18付~6/26付)

1967年 53才

6月	ランゲーン市内で反中国人暴動。市内に戒厳令。
7月	上記の事件に関して論文「毛沢東の中国とビルマの主権」で毛沢東批判。後に出版されベストセラー。
10月	10年振りの長編「ティーターピョン」執筆。従来の読者には不評。小説創作のむずかしさを再認識。以後創作的小説を断念し、ノンフィクション風、随想風小説を書く。

○	「チン丘陵の歴史のはじまり」サペバイマン賞一般の部で1位。
(評)	「ビルマ語ビルマ文学と独立闘争」(Boutahtaung 紙1/4付)「セインカラウン (バンドゥラウセイン)」(同紙1/18付)「文芸批評において何を主な指標にするか」(同紙1/27付)「キンモン村とコンバウン期初頭」(Chindwin Journal 1月)「文学界に新しい歴史がはじまる」(Ngwetayi 誌1月)「類似点を強調すること」(Boutahtaung 紙2/12付)「人民のための科学、文学」(同紙2/13付)「翻訳で人民から人民へ」(同紙2/15付)「新聞記者正しい立場へ到達」(同紙2/28付)「生まれ故郷上ビルマを忘れられない僧正」(Chindwin Journal 2月)「受賞小説4編」(Ngwetayi 誌2月)「小説構成の新しい場を求める」(Chindwin Journal 3月)「受賞した3冊の詩集」(Ngwetayi 誌3月)「学士号授与式」(Myawaddy 誌3月)「豊かな頭、明かるい心、健やかな体で旅に出る」(Do Kyaungdha 誌3月)「話し合う科学者と作家」(Myawaddy 誌4月)「錬金術に似た科学小説」(Chindwin Journal 4月)「外国の書とキューバ」(Boutahtaung 紙5/3付)「年老ったなら」(Ngwetayi 誌6月)「毛沢東の中国とビルマの主権」●(Boutahtaung 紙7/4—7/23付)「作家と読者の需給の一致」(同紙8/3付)「申し立て書の補足」(Myawaddy 誌10月)「私の主人公の一人が予期せずして現われたこと」(Ngwetayi 誌11月)「植物学」(ビルマ教科書委員会、中級読本)
(小)	(長)「ティーターピョン」●(Boutahtaung 紙10/20~'68.1/11付)
1968年 54才	
○	「ティーターピョン」民族文学賞4位受賞。
○	執筆のペースゆるやかになってゆく。
(評)	「チャイカサンメーの微笑」(Ngwetayi 誌3月)「文学賞と文学者の人生」(Tint Bawa 誌12月)「論争された評論」▲(Min Hswe Press)(過去の評論収録)
1969年 55才	
(評)	「我々の体を我々が売る」(Boutahtaung 紙5/27付)「あの時あの頃は正しかったのだ」(同紙9/19付)「試験」(教科書編集委員会高校、選択教科書)「私の小説の中の人物達」★(Nantha Press)「国内和平助言委員会論文批判」★(Hla Myo Press)
(小)	(長)「海の旅人と真珠姫」●(Boutahtaung 紙4月迄連載)
1970年 56才	
○	革命評議会顧問会議副議長(～74年)
(評)	「学士号を持つ失業者達」(Boutahtaung 紙1/23付)「人間のみが主要であるという原則」(Agaza hnit Kaya Pinnya 誌2月)「ラングーン大学50年の歩み」(Boutahtaung 紙5/24付)「スポーツと労働者」(Agaza hnit Kaya Pinnya 誌5月)「合格率に関して」(Boutahtaung 紙6/27付)「新しい英語教授法」(同紙10/15付)「青年学生問題」●(同

紙11/11～11/20付)「1920年ストライキを迎えた人民運動」(Hanthawaddy 紙11/23付)「1920年学生ストライキとビルマ文学」(Thwethauk 誌12月)「大学構内を越えて」(ランゲーン大学50周年記念誌12月)「帰り道のないウヌ」★(Padetharaza Press)「1930年一帯のビルマ政治史」(Sein Sa Press)	
(小)「山の精霊の湖」(Myawaddy 誌4月 Yefermov 作 Deniber—The Lake of the Mountain Spirits を妻と共訳)	
1971年 57才	
(評)「話すとおりに書く問題」(Moway 誌4月)「選集1 文芸評論」▲「選集2 教育評論」▲(Nantha Press) (過去の評論を収録)	
1972年 58才	
(評)「小説風伝記とは何か」(Wutmon 誌3月)「タラワディ地方のある50周年記念」(Myawaddy 誌8月)	
(伝)「ある銀婚式」★(Sapay Beikman Press)	
(紀)「東北地方の一角」●(Boutahtaung 紙12/28～'73.1/29付)	
1973年 59才	
○	全国公聴会委員、人民評議会選挙実施委員。
(評)「粗悪フィルムの問題」(Boutahtaung 紙6/30付)「反対票の組織」(同紙9/27付)「全国公聴会」(Shedho 誌10月)	
1974年 60才	
3月	第一回人民議会成立。軍政から民政移管。実質的には前体制継続。
○	出生後1934年迄の自伝「私の初恋」発表。
(評)「ポーチョーミン」(Boutahtaung 紙6/9付)「中国針治療と黄道帯」(Myawaddy 誌8月)「工場労働者から数学者へ」(Ngwetayai 誌10月)「あるモンビルマ文化風習」(タンビュー地区100周年記念誌12月)「エッセイストの体験」(Pyidhudo i Zagabyan)	
(伝)「私の初恋」★(Yeelay Press)	
1975年 61才	
○	1935年から1938年迄の自伝「進歩的現代人テッポンジーテインペ」発表。これに続く自伝も執筆されるが複雑な時代背景を理由に出版許可されず。
(評)「生産協同組合の中心」(Thamawayama Journal 1月)「文学討論会」(Jalayan Sapay Press 6月共著)	
(伝)「進歩的現代人テッポンジーテインペ」★(Thanlwin Press)	
(紀)「我等のモンビルマ」★(Jalayan Sapay Press 8月)	
1976年 62才	

(小) (短)「美よ今日はお前に会えなかったのか」(Moway 誌5月)「彼等夫婦の34年」★ (執筆9月)「翼のある花」(Shumawa 誌11月)	
1977年 63才	
(小) (短)「青龍木が黄金にぬれる時」(Shumawa 誌7月)「座る場所を1つ見つけて」 (同誌8月) (長)「老夫婦より生まれいつる愛」(同誌11月12月)	
1978年 63才	
1月15日	脳卒中にて死去。
3月(評)	「真実の愛正しい愛に関して」(遺稿 Shumawa 誌3月)

参考文献

Lanzin Dhadinza Saya Apwe : “Ngeinjanye hnit Thein Pe Myint Andaye” 1963, Rangoon

Patrica M. Milne : “Selected Short Stories of Thein Pe Myint” 1973. 6, New York

Thein Pe Myint : “Kyundaw i Achitoo” 1974, Rangoon

“Kyaw Ngein” 1969 (第2版), Rangoon

“Sit Atwin Hkayide” 1968 (第4版), Rangoon

“Tahku dhaw Ngweyadudhabin” 1973, Rangoon

“Tet Hkit Tet Lu Tet Ponji Thein Pe” 1975, Rangoon

“Wuttuto Baunggyout” 1966, Rangoon

大阪外国語大学ビルマ語研究室 : 「ビルマ史年表」1960

大野徹 : 「ビルマ共産党の執跡」アジア研究21巻3号1974

トンプソン・アンドロフ共著 : 「東南アジア—アショナリズムとコミュニズム」弘文堂, 1951

テインペーミン長女チーターミンから筆者への書簡